

新村猛と『世界文化』

—— 1930年代京都のフランス的文脈を踏まえて ——

藤野志織*

はじめに

1946年6月に開校した京都人文学園は、それまでの学校教育に異議を唱え、新しい教育のかたちを模索する実験的な「学校」であった。そして、その創立理念や教育方針の練り上げに重要な役割を演じたのが、初代学園長の新村猛（1905-1992）である。新村は、1930年代に反戦・反ファシズム運動を展開した『世界文化』グループの中心人物であり、この活動のなかで培われた信念と人脈が京都人文学園の基盤を準備した。

京都で発行された『世界文化』（1935年2月～1937年10月、全34号）は合法紙として海外事情の「紹介」というかたちで、人民戦線的な文化運動を行った。固定された場所を持たないメディアという特質を生かして、学際的な学問文化の発信・交流拠点として機能したのである。結果は、関係者の一斉検挙と、それに伴う発刊停止で幕を閉じるが、1930年代における集団的・組織的な文筆による抵抗運動として、政治、文化、ジャーナリズムなどの各方面において高く評価され、敗戦直後に盛り上がりを見せた教育文化運動、とりわけ京都人文学園の胚胎として注目されている¹⁾。

山寄雅子は、新村を『世界文化』の実質的な主導者と見做し、その重要性を強調するとともに²⁾、彼の教育への興味は専門のフランス文学から生じていると指摘する³⁾。『世界文化』が取り上げたテーマを見ても、フランスと関わるものが群を抜いて多い⁴⁾。このことは、新村が本誌の素材となった新聞や雑誌の大部分をフランスから取り寄せていたことや、メンバーにはフランス語に習熟した者が多かったという事情と関わる。このように、新村の思想形成や『世界文化』の特徴を考えるにあたり、フランスという視角は重要な位置を占めている。

本稿が試みたいのは、こうした新村とフランスの結びつきや、『世界文化』におけるフラン

*ふじの しおり 京都大学人文科学研究所

スの表象を1930年代の京都という文脈のなかで再考することである。例えば、新村らが通った京都帝国大学文学部仏文科での学びは、『世界文化』の内容にどのような影響を与えているのか。あるいは、大学の隣に位置した、フランス政府公認の文化・教育機関である関西日仏学館の授業や文化プログラムと比較した際、『世界文化』が取り上げる「フランス」にはどのような特徴が見られるのだろうか。このような疑問を足がかりとして、学都京都のフランス・アカデミズムのネットワークを視野に収めながら、『世界文化』の独自性を見極めることが本稿の狙いである。

1. 新村猛とフランス

(1) 読書と学び

まず、第三高等学校から京都帝国大学までの読書経験及び、フランス語学習のプロセスを確認していきたい⁵⁾。新村の著述を読んでいくと、彼の文筆や生活を支えた「仏文」という選択は、単にフランス文学が好きだ、といった単純な理由によるものではなく、家族との関係、社会状況、教育制度などさまざまな要因に影響され、いわば流れ着いた場所であったことがわかる。

新村猛は、言語学者・文献学者で京都帝国大学教授の新村出の次男として、1905年に東京に生を享ける。1909年に一家は京都に移住。1920年に新村は京都第一中学校に入学する。同窓生には、湯川秀樹や、後年ともに反ファシズム文化運動を組織することになる真下信一がいた。また、上級生に当たる貝塚茂樹や桑原武夫らと共に回覧同人誌『近衛』を発行し、七五調の新体詩や短歌を発表していた。一中時代の新村は、社会問題や労働問題に関心を寄せることもなく、地道に勉強をする生徒であった。

この頃から英語の学習に人一倍励み、高等学校ではフランス語を学ぶ希望を抱き、英語で書かれたフランス語文典を丸善の京都支店や大黒屋書店で購入し通読していた。フランス語を選んだ理由の一つは、先に三高に入学していた兄秀一が文科乙類でドイツ語を学んでいたことであった。つまり、兄とは違う言語を身に付けようとしたのだった。このほか、第一次世界大戦時に連合国側に加わった日本政府が、国民に反独感情を煽り立てたことに影響され、子供ながらにフランス鼻頂になっていたこと、父のもとに届く雑誌『白樺』の口絵に載ったフランス印象派の絵画に魅了された事情が挙げられる。

そして、1923年4月に三高の文科丙類に入学した新村は、第一外国語であるフランス語を、折竹^{たもつ}錫、河野与一、伊吹武彦に学んだ。教科書ないしは教材には、折竹が国際連盟規約のフランス語原文と社会学者ギュスターヴ・ル・ボンの著述を使用したことを除けば、河野と伊吹はいずれもモーパッサン、レニエ、デュアメルなどの近代文学作品を用いた。後年新村は、三

高，大学時代を通して学んだ恩師のなかでも，最も多くのことを教えてくれたのは折竹であり，その堅実な文法の解説がフランス語をできるだけ正確に読む力を養ってくれた，と述懐している⁶⁾。また，優れた師の存在だけでなく，三高の文科丙類の生徒に課された週34時間の授業の大半はフランス語の学習であったため，非常に高度なフランス語能力を身に付けることができた【図1】。



新村恭氏所蔵

図1 第三高等学校時代の新村猛（前列右から三人目）

新村は質の高い教育環境に身を置き，2年生の後半には，大黒屋書店で販売していたフランス古典文学の教科書版を何冊か買い込んで，脚注に頼りながらも，コルネイユの『ル・シッド』やモリエールの『人間嫌い』をどうにか読解できるまでになっていた。とはいえ，フランス文学ばかり読んでいたわけではない。20歳前後の新村がとりわけ心を揺さぶられたのは，ドストエフスキーの『悪霊』や『カラマゾフの兄弟』，チャーホフの『六号病棟』，プーシキン『エヴゲーニイ・オネーギン』，トーマス・ハーディの『テス』，ゲーテの『ファウスト』『詩と真実』などであった。新村は邦訳で読んだこれらの作品が，原語で読んだフランスの作品のいずれにも増して深く心に残っていると告白している⁷⁾。

言葉を変えれば，これは新村のなかでフランスが確固たる位置を占めていたわけではないことを意味する。少なくとも文学への好みに限って言えば，フランスの作品よりも，ロシアやドイツの作品を耽読していたのである。こうしたフランス語に愛着はあれど，フランス文学に対して情熱が持てないという状況は，彼が京都帝国大学の仏文科に落ち着くまでの道りを複雑なものにしている⁸⁾。新村は三高在学時には，東京帝国大学の言語学科に入る希望を抱いており，経済的な事情により東京行きを断念した後も，まず京都帝国大学の史学科へ入学している。史学科で東洋史（西域史）を専攻したのは，フランス語を活かせることが主な理由であったものの，その古色蒼然とした雰囲気馴染むことができず，文学科への転学科を願い出た。その際にも，彼が希望したのは仏文科ではなく英文学科であった。

新村はこうした紆余曲折について，敬愛する父と同じ学問を修めたいという願望，フランス近代文化に対する不信，仏文を志望する軽佻浮薄な級友への反感，史学科時代に出席した英書講読の影響などによって説明を試みているが，やはりその根本に，フランス文学への関心の欠如を見ないわけにはいかないだろう。その顕著な現れとして，最終的に仏文科を選択した経緯を挙げることができる。多くの学生が社会主義思想に傾倒していく時代に歴史研究への疑問を

募らせた新村は、史学科に1年在籍したのち、1927年に文学科に転じ、フランス文学を専攻する。先に触れたように、当初は英文学専攻を志望していたが、英文科は学生が多いので、仏文科にするようにという父のアドバイスに従ってのことであった。ただしこの時でさえ、フランス文学研究で身を立てるつもりはなく、仏文で学ぶ教養を生かして作家になりたいと思っていたのである。

以上のように、新村はフランス文学について深く学びたいということとは全く異なる動機によって、仏文という世界に身を置くことなる。そして、学部時代の新村は文学作品よりむしろ、知識人の思想や行動を通して、フランスに感化されていく。このことは、隣接する領域への回路となって新村のものの見方や行動を支えるようになった。例えば、彼の社会主義思想への接近もマルクス・レーニンの社会主義学説を通してではなく、フランスの哲学者ベルクソンや社会主義者・政治家ジャン・ジョレスへの敬意を通してなされた⁹⁾。彼が京都人文学園創立時の規約に掲げる「行動の人として思考し、思考の人として行動する」というテーゼも、ベルクソンに由来するものである¹⁰⁾。そのほか、彼がマルクス主義を理解するために、18世紀のフランスの啓蒙思想家ヴォルテールや、ディドロ、ルソーの思想を学ぶ必要性を語ったところ、仏文科の友人に一蹴されたという話がある¹¹⁾。こうしたエピソードからも窺い知れるように、新村の思想形成の独特な点は、一般的な受容の経路とは異なり、フランスの著述を通して対象の理解を深めようとしたところにあると言えよう。

さて、大学在学中の新村の読書歴についてももう少し見ておくと、フランスの古典派の文学を重視する仏文科の雰囲気の中で、古典文学の主要作品を広く読んだ。卒業論文では、17世紀の古典派詩人で寓話作家として知られるラ・フォンテーヌを取り上げる。同時に、ラ・フォンテーヌの長編詩「アドニス」に関する批評をものしたポール・ヴァレリーに親しみを覚え、彼の「海辺の墓地」を愛唱するまでになった。

そうして旧制大学院に進学した新村は、フランス・ルネサンスを研究題目に掲げる。引き続き古典派の作品を読んだほか、18、19世紀の重要な作品を読み進めた。京都人文学園の構想に関わる、ルソーら啓蒙思想家の教育改革論に触れたのもこの時期である。また同時代の作家として、ヴァレリーから、社会問題についての関心を作品に反映させたアンドレ・ジッドに興味を移した。同時に、ロマン・ロランのゲーテに関する論文に感銘を受け、ロランに傾倒するようになる【図2】。ヴァレリー、ジッド、ロランは、邦訳書が出版され始め、詩の註解書が刊行されるなど、日本でも名の知られた作家であった。先に触れたジョレスについても、1925年には柳沢健による『ジャン・ジョレス』にレヴィ=ブリュールの文章が訳出されるなど、日本語での紹介が行われていた。このように、新村の読書経験が日本における翻訳や紹介に支えられ、深まっていったことは重要である。新村とフランスの結びつきは、時代の空気を反映した知識人形成のなかにあるのだ。



1931年12月撮影。当時は新村は京都帝国大学仏文科の院生
新村恭氏所蔵

図2 三高フランス会に参加する新村猛（前列右から二人目）

その一方で、1931年の満州事変に際して、無産政党が軍国主義に追従したのを目の当たりにしたことは、新村の社会主義思想に大きなショックを与えると同時に、非合法の存在であった日本共産党に信頼と支持の気持ちを抱かせた。それまで河上肇の個人雑誌『社会問題研究』に書かれたいくつかの論文や、山川均、大森義太郎、向坂逸郎が『改造』に寄稿した論文を読む程度であった新村は、マルクス、エンゲルス、レーニン

の著作の仏訳を数冊取り寄せ、読み進めるようになる。こうした時期が2年ほど続いた後、ドイツ文学者となった真下信一と同志社大学予科で同僚となり、滝川事件が起こった1933年春から翌年初頭にかけて、真下の紹介で、哲学者の久野収や美学者の中井正一らと交流を持つようになる。マルクス主義の理論に通じる彼らに触発されて、岩波文庫でマルクス、エンゲルス、レーニンの著作を読み、彼らとの議論を通して、マルクス・レーニンの学説への理解を深めていった¹²⁾。

そして、新村とフランスとの関わりを考えるうえで、とりわけ『世界文化』の活動を推進するうえで決定的だったのは、彼が裕福な学者の家に生まれ、洋書を取り寄せることのできる環境にあったことである。1932年の夏にロランとアンリ・バルビュスらが議長となり、反戦・反ファシズム大会を開催したことを彼が知ったのは、当時の仏文研究者が最もよく読んでいた雑誌『新フランス評論』を通してであった。そこで、ジッドがこの大会を支持するために、ロラン、バルビュスらに書き送った手紙を読んで以来、新村はファシズムに抗い、平和と自由を守るために行動する同時代のフランスの作家たちに敬意と強い興味を抱くようになった。そして、バルビュス、ルイ・アラゴンらが創刊した『コミューヌ』誌、カトリック左派の思想家が発刊した『エスプリ』誌を初号から発注し、購読すると同時に、文化雑誌『ヨーロッパ』の購読を始めた。このほか、バルビュスが創刊した週刊誌『世界』、その後続誌として発刊された週刊誌『金曜日』、日刊新聞として社会党機関紙『ル・ポピュレール』と自由主義系の『ウーヴェル』、さらに人民戦線高揚期に遅れて発刊された夕刊紙『ス・ソワール』を取り寄せた。これらは後述するように、新村が編集に関わった『美・批評』『世界文化』『土曜日』の資料として使われるようになる。

(2) 京都帝国大学文学部仏文科での学び

ここまで、主に読書を通じて育まれた、新村のフランスへの関心や共感を見てきた。これは文学作品というよりも、行動する作家や知識人に向けられたものであった。新村は、いわば実社会でどのように考え、動くべきかを示すモデルとしてフランスを見ていたと言えるだろう。そして、こうした影響は彼の教育観にも及んでいる。18世紀の啓蒙思想家ルソー、デイドロ、エルヴェシウスの教育改革論に大きな感銘を受けたことが、京都人文学園の創立につながっていくのである¹³⁾。山崎雅子も指摘するように、新村の教育改革の芽は『世界文化』や文化新聞『土曜日』に掲載された記事や論文に見出すことができる¹⁴⁾。

それでは、新村自身は、京都帝国大学の仏文科でどのような教育を受けていたのだろうか。以下では京都帝国大学文学部におけるフランス文学の学びを関西日仏学館との関係のなかに位置付けつつ、『世界文化』へと至る道筋を照らしてみたい。

まず、京都帝国大学文学部仏文科の成り立ち及び教育体制を確認する¹⁵⁾。京都帝国大学が創設されたのは1897年であり、文学部にフランス語・フランス文学を教える教員が置かれるのは1923年のことである。東京帝国大学の文学部（当時は文科大学）にフランス文学科が設置されるのは1886年であるから、東京は約40年間、全国に先駆けてフランス語を学ぶ場を独占していたことになる。

1906年に開設された京都帝国大学の文科大学は、1919年の帝国大学令によって、京都帝国大学文学部として改組され、哲学・史学・文学という三学科を置いた。哲学科は1919年に、史学科は1920年に、文学科は1921年に開設された。各学科には正科目と副科目があり、正科目は原則1回生が受講する「普通講義」、2回生以上の専攻学生が履修する「特殊講義」、卒業論文を執筆する3回生以上を対象とした「演習」で構成される¹⁶⁾。当時の文学部講義題目を繕くと、仏文学専攻に関しては、このほか「第一回講読」と「第二回講読」が開講され、副科目の文法や翻訳に関する授業の聴講は任意であった。本専攻の定員は10名程度であった¹⁷⁾。新村の入学時には同級生が3名、上級生は7名ほどで、そのなかには桑原武夫や生島遼一がいた。こぢんまりとした雰囲気の中で、新村は学部1回生の頃から上級生に混じって積極的に授業に出席していたという¹⁸⁾。

続いて、仏文科で教鞭を執った面々をざっと見ておこう。文学科で最初にフランス文学を担当する助教授として迎え入れられたのは、東京帝国大学文学部を卒業した太宰施門であった。太宰は、文学部を卒業後、第一高等学校で教授として働いていた折、在外研究員としてフランス留学を命じられ、1920年に日本を発った。フランス滞在中の1921年に京都帝国大学助教授に任じられ、1923年2月に帰国した。そして、同年4月より、正科目のフランス文学を担当した。1924年には落合太郎が加わり、二人を中心に授業が行われるようになる。太宰とともに京大仏文の黎明期を支えた落合は、1933年3月の太宰の教授昇進に伴い、仏文科助教授に

任命されるまで、法科大学に所属しながら、講師として講義、講読、副科目を担当した。1927年からは外国人講師¹⁹⁾に講読の一部を担当させ、授業内容を充実させていく。

新村によれば、太宰はギリシア正教徒・伝統重視の人物であって、17世紀の古典文学を敬重し、18世紀の啓蒙思想には関心が薄かった。フランス文学概論の講義を担当したほか、17世紀を代表する劇作家であるコルネイユ、モリエール、ラシーヌの韻文作品（戯曲）を網羅的に取り上げた。文学科の書庫に所蔵されていた図書の多くは17世紀と19世紀に関わるもので、中世及び16世紀（ルネサンス時代）、20世紀に関する図書は非常に少なかったという²⁰⁾。他方、若い頃漱石宅に出入りし、文学を志していた落合は、16世紀末のモンテーニュから、17世紀のパスカル、ラ・ロシュフコー、ラ・ブリュイエールを経て、18世紀前期のヴォーヴナルグに至る、いわゆるモラリストと称される文筆家を取り上げた²¹⁾。

(3) フランス教育人材の相互流入

さて、このように仏文科は太宰のイニシアチブの下に、落合との二人体制で運営されていたわけだが、京都でのフランス語教育を考えるうえで、見逃すことができないのが関西日仏学館の存在である。1927年10月に京都の九条山に開館した学館は、フランス政府公認の文化・教育機関である²²⁾。フランス語教育に注力するとともに、数多くのコンサート、講演会、映画上映、展覧会を通して、フランス文化の発信に努めた²³⁾。

そして、1936年5月に京都帝国大学の隣、南北に延びる東大路通を挟んだ吉田泉殿町に建設した新館に活動の場を移した【図3】。京大の横に移ってきたのはもちろん偶然ではない。新館の建設に先立ち、1934年に新館用地の南に獨逸文化研究所が設立されていたのである【図4】²⁴⁾。ここには、日本の将来を担うエリート学生たちを受講生として獲得し、自国の覇権を強める狙いがあった。ドイツとフランスが隣り合う京都は、言うなれば熾烈



フランス外交史料館ラ・クルヌーヴ館所蔵

図3 関西日仏学館新館



獨逸文化研究所全景

獨逸文化研究所発行『創立五周年紀要』より
国立国会図書館所蔵

図4 獨逸文化研究所

な文化プロパガンダの主戦場であったのだ。とはいえ、そうした文化外交戦略は、エリート層のみをターゲットとしていたわけではない。文化イベントは市民に開かれ、無料で参加することができた。授業は有料であったが、専任教授のほか、京都帝国大学の教授が出講するなど、フランスやドイツについて学ぶ意欲を持つ市民に、質の高い学びの場を開いていた。換言すれば、京都帝国大学と二つの文化・教育機関は相即的に機能し、幅広い層に文化を発信し、教育を提供していたのである。

もちろん、仏文科が一方的に人材を提供するだけでなく、学館の教授陣もまた仏文科に出講している。いわば、講師の相互乗り入れシステムが構築されていたのである。とりわけ興味深いのは、このネットワークが、三高、天理外国語学校、大阪外国語学校など広範囲にまたがっていたという点である。京都府の統計資料によれば、1920年代後半から1930年代にかけて、在留フランス人の数は平均して10名程度であった。要するに、学館で日々のフランス語の授業を回していくために、関西一円から人材をかき集める必要があったのである。そして京大仏文科もまた、このネットワークを利用し、府外の学校に所属するフランス人講師を講読の授業に迎え入れている。

それでは、どのような人材が集まったのか瞥見しておこう。まず関西日仏学館に出講した面々を見ておく。京都帝国大学仏文科教授太宰施門（1931～1935年度）、京都帝国大学講師おもだかひさゆき澤瀉久敬（1938～1943年度）、三高教授折竹錫（1936～1940年度）、同じく三高教授伊吹武彦（1933年、1938年度）、そのほか大阪外国語学校、龍谷大学などからも出講している。また、新村猛も大阪に新設された学館の分校で1942年度に、京都の本館で1943年度に1年ずつ教えている²⁵⁾。当時の同僚には、京都人文学園で教えることになる仏文学者でロランの専門家であった宮本正清も含まれていた。

その一方で、戦前の仏文科で教えた学館関係者として、後に学館の第4代館長となるマルセル・ロバール（Marcel Robert, 1927～1929年度）、学館第2代主事ジョルジュ・ボノー（Georges Bonneau, 1931年度）²⁶⁾、大阪外国語学校講師ロジェ・バレ（Roger Ballet, 1931年度）、三高講師アンリ・ガルニエ（Henri Garnier, 1932～1935年度）、大阪外国語学校講師アルベール・ロトマン（Albert Lautman, 1932～1933年度）、彼の後任として大阪外国語学校講師となったポール・イズレール（Paul Iseler, 1934～1935年度）、同じくイズレールの後任講師ピエール・ベルトラン（Pierre Bertrand, 1935～1937年度）、カルドン・ド・モンティニ（Cardon de Montigny, 1936, 1941～1943年度）がいた。また、三高で教えていた学館の教授として、ジャン＝ピエール・オシュコルヌ（Jean-Pierre Hauchecorne）とオレスト・プレトネル（Orestes Pletner）がいる。前者は1939年より学館の専任教授として働いていたが、1941年より三高講師を兼任する。後者は、天理外国語学校教授・三高教授を兼任し、1935年から1940年度にかけて学館で教鞭を執った²⁷⁾。

このように、フランス語を教える人材は学館を中心として、関西の主だったフランス語教育機関のあいだでネットワークを形成していた。これは言い換えれば、人材不足でもある。問題は深刻であり、学館講師の穴を埋めるために、東京から教育経験のあるフランス人を招くこともあった²⁸⁾。こうした人材の不足は、学館の支柱である文化事業にも大きな影響を及ぼした。よって戦前においては、フランス租界がある天津や上海、仏領インドシナのハノイのフランス人研究者が来日し、日本各地で講演ツアーを行う事例や、東京の日仏会館のフランス人所長や研究員が日本国内、中国にも足を伸ばして講演するという事例が見られた²⁹⁾。要するに、留め置ける人材に限られている分、その移動は非常に活発であった。こうした現象は、日本を東アジアの一地域として捉えるフランスの文化外交政策の一端を示すものであり、フランスの文化・学知の発信と日本での受容を考察するうえで、今後不可欠な観点となるだろう。

(4) フランス語教育の位置

さて、続いて京都帝国大学仏文科と関西日仏学館の授業内容を比較し、当時のフランス語教育の傾向を明らかにしたい。戦前の学館は15歳以上の男女に門戸を開き、男性が学ぶ「普通部」、フランス政府招聘留学生試験の準備を行う「専門部」、女性が文部省フランス語教員資格検定試験の準備を行う「女子部」のほか、ラテン語、フランス医学、フランス文化、フランス経済学、美術部、音楽部など多彩なプログラムが提供されていた。先ほど「相即的」という表現を用いたが、学館は単に京大仏文科に通うことのできない市民を受け入れていたというだけでなく、医学や経済など、より専門的な知識を求める学生たちの受け皿ともなっていた。よって両者の教育内容を比較するのは容易ではないが、ここでは議論を複雑にしないために、学館の普通部で取り上げられた文学作品に焦点を絞ることとしたい。

仏文科での講義内容については、すでに触れたが、もう少し大まかな傾向を見ておく。太宰は17世紀の戯曲作品や演劇論が中心であったが、19世紀の小説・批評（バルザック、サント＝ブーヴ、フロベール）なども取り上げ、落合はモンテーニュを繰り返し扱ったほか、パスカルやテューヌ、デカルト、アランなどモラリストの著述を好んで取り上げた。戦前の仏文科は専任のフランス人講師を置いていなかったため、彼らは約2年ごとに入れ替わりながら、講読の授業を受け持った。そのなかで太宰や落合と共通して古典文学も取り上げたが、特徴的なものとして、18世紀の啓蒙思想家であるルソーやヴォルテール、19世紀の象徴派と関わる詩人、ラマルティエヌ、レニエ、ヴェルレーヌらの作品が見られる。また同時代の作品としては、モーリス・バレス『ベレニスの園』（1891）、ヴァレリーの『若きバルク』（1917）、ジッドの『田園交響曲』（1919）などが取り上げられた³⁰⁾。講義題目と教材は、主任教授であった太宰の古典文学の尊重によるものではなく、19世紀末以降、フランス本国が採用した学校教育の方針、文教政策に由来するものであると新村は指摘する³¹⁾。

こうした教育環境はもちろん新村にも強く影響した。行動や思考のモデルとしてフランスへ共感を寄せていた新村だが、卒業論文の主題には17世紀の寓話詩人ラ・フォンテーヌを選んでいる。これは仏文科において古典文学が主要な位置を占めていたことが、自発的な興味と理解の深まりを促したという事情があった。特に彼が2回生の時に、マルセル・ロベールの講読でラ・フォンテーヌの『寓話詩集』を読んだことが決定的な影響を与えた³²⁾。1930年に大学院に進学し、



新村恭氏所蔵

図5 マルセル・ロベール（前列中央）と新村猛（後列左から二人目）

1931年に同志社大学予科に講師として就職したのちも、新村は余暇を利用して、モンテーニュやヴァレリーの講読に列席したり、太宰の「前ロマン主義」と題する特殊講義を傍聴したりしながら、勉学と研究を続けたのだ³³⁾。新村が治安維持法違反の廉で検束され、出所後に一時働いていた関西日仏学館の当時の館長は、奇遇にもロベールであった【図5】。

さて、先ほど示した教育方針に関わる新村の指摘は、学館で取り上げられた文学作品についても当てはまる。教える人材が共通しているのだから、内容が似たり寄ったりになることは当然であると思われるかもしれない。しかし、テーマの決定が個人ではなく、主任や委員会によってなされたであろうことを踏まえると、仏文科と学館の授業はフランスの文教政策の強い影響下で組まれていたと考えるのが自然であろう。

それでは1938年度の学館の報告書をもとに、授業内容を見てみよう。文法の授業は日本人教授が担当することもあったが、基本的にはネイティブの教授がフランス語で授業にあたった。第1学年では、語学の習得が優先され、フランスについての入門書を読むほか、文学作品としてはジョルジュ・サンドの『魔の沼』が挙げられているのみである。第2学年になると、モリエール、アナトール・フランス、アルフォンス・ドーデなどの文学作品の割合が増えてくる。第3学年になると、17世紀のラ・フォンテーヌに始まり、20世紀のエドゥアール・エストロニエに至るまで代表的な作家の戯曲、小説、詩が一作品ずつ取り上げられている³⁴⁾。ほかの年度についても同様の傾向のもとで授業が組まれており、特定の時代や流派、ジャンルに偏ることなく作品を扱う点は仏文科と共通する。フランス語の規則が整備され始めたのは17世紀であり、綴りや意味、表現の新旧は多少あれど、3世紀遡って書物を理解できるというのが、フランス語を学ぶ大きな強みであった。学館は、学習者のニーズを汲み取り、医学や経済学、美術や音楽など幅広いプログラムを用意していたが、その基盤は極めてオーソドックスな教授法に

則ったものであったと言える。

したがって、17世紀から現代までを対象としながらも、関西日仏学館は広く浅く、京大仏文では、専門的に深く講義が提供されたとまとめることができるだろう。同時に興味深く思われるのは、テーマから政治性や宗教性が排除されている点である。同時代の作家を取り上げることこそあれ、政治的な主張を露わにしたものではないことが暗黙の了解となっている印象がある。これは単に伝統的なフランス語教授メソッドの問題だけではなく、日本の時局に配慮した結果でもあったはずだ。よって、これから見ていくように、学館や仏文科でのフランスの表象を『世界文化』におけるそれと比較したとき、際立ってくるのは何よりもまず、社会・政治に対する問題意識や時事性ということになるだろう。

2. 新村猛と『世界文化』

(1) 『美・批評』から『世界文化』へ

『世界文化』成立の端緒は、雑誌『美・批評』に求められる。1930年9月、京大文学部美学科出身の美学者中井正一を中心に、京都に住む若手の美学者・哲学者が集い、「美学・芸術学・芸術史の理論的研究専門誌³⁵⁾」を目指して『美・批評』が創刊される。ここには、『世界文化』の同人となる辻部政太郎、富岡益五郎、長広敏雄も含まれていた。1933年4月に起こった滝川事件をきっかけに、彼らは学問の自由を擁護するため立ち上がり、特に中井は文学部対策委員会で中心的な役割を果たした³⁶⁾。しかしながら、5月に劇的な破局を迎えた事件の余波を受けて、『美・批評』は第27号をもって休刊に追い込まれた。

その後、学問と思想の自由を守るという意図を込めて、美学・美術史以外の領域にも裾野を広げ、人文・社会学系の有志を募り、1934年5月より『美・批評』が再刊される。新村は滝川事件の折、真下信一、久野収と親しく交際するようになり、彼らの誘いを受けて、第二次『美・批評』に参加することになった。20名から30名の有志はみな25歳前後の若い学徒であった³⁷⁾。当時の『美・批評』の雰囲気は新村は次のように振り返る。「滝川事件を記念し学問・思想の自由を守るなどといっても、別に誰かが声を大にして力説したというわけではなく、それはいわず語らずのうちに皆が胸におさめていた共通の感情であった。それよりもむしろ、われわれに共通の関心事であり念願の目標であったのは、大正末期このかた唱えられていたマルクス主義的芸術論、あるいは美学にあきたりなく思い、もっと理論的に水準が高く説得力に富むような芸術論あるいは美学を探求することであった³⁸⁾」。新しいアカデミズムのあり方を模索する前衛的な性格を持つ雑誌であったが、新村の言葉からは、これが強いイニシアチブのもとに組織された集団であったというよりも、「寄り合い³⁹⁾」的なゆるやかな場であったことが伝わってくる。そして、1934年9月に『美・批評』は第32号をもって終刊となる。美学・

美術史以外の人間が加わったこともあり、広く世界の学術文化の最新動向を紹介することを目的として『世界文化』と改題し、新たなスタートを切ったのである⁴⁰⁾。

『世界文化』は、1935年2月に創刊し、1937年10月の廃刊までに34号を数えた。創刊当時のメンバーは、真下信一、久野収、島津（栗本）勤、新村猛、和田洋一、森本文雄、市村恵吾、瀬津正志、中井正一であった。『世界文化』創刊号に掲載された次の言葉は、彼らが話し合っ
て出した文章である⁴¹⁾。本誌の方向性をよく表していると思われるので、まずこれを引用する。

歴史に於ける一つの歴史的な時代として此の時代を特徴づけるのは、確かに當つてゐる。これまでの時代の何とか解釋のつけ得られた、あり来りのテンポが、破られて、亂れて、所謂『非常時』—危機—なのである。ふとふりかへつて見て、自分の立つてゐる舞臺に氣がついた時、ひたすら今まで努めてゐた自分の努力が、これでいゝのか、それともいけないのか、疑はれて来る。時代のテンポがすっかり變つてゐて、自分がそれについて行けるか、行けないか、に迷ふ。不安。今までのものが無意味に見える。ニヒリズム。正に此の様な不安とニヒリズムとに、此の時代のインテリゲンツィアの敏感な部分が今、立つてゐる。學問文化への不信頼と絶望。だが、まじめな頭と胸とは、到底此の様な不安と絶望には堪へられない。新しい、しつかりした、もう再びは背かれることを知らない文化の、大通りを探し求めざるを得ない。その様な世界文化の大通りこそは、たゞまじめに努力する人々にのみ踏まれるであらう。努力すると云ふことは、動いてゐると云ふことだからである。だから、この雑誌も、出來上つた、一定の場處に落つてゐる人々のものではなくて、たえず、本當のもの、正しいものを求めつゝ、動いてゐる人々の友である。眞理の扉を、たゞくことを忘れないでゐる眞摯な手によつてのみ、この雑誌は育てられるであらう⁴²⁾。

この「學問文化への不信頼と絶望」が滝川事件によって表面化し、彼らに取り憑いたことをく
だくだく述べる必要はあるまい。前半の切れ切れの文章から行き場のない不安や迷いが感じ
られるとすれば、後半は対照的に力強く、こうした現状を「世界文化」によって乗り越えよう
と宣言する。そしてこの「世界」は、国境も時代も専門領域も超えた広がりを持つものとなる。

『世界文化』は70ページ程度の月刊誌であつた。海外の事情を紹介するということで新聞紙
法が適用されることになり、保証金を出し合つて、合法的な営利雑誌として全国に発売した⁴³⁾。
毎月内務省の検閲課と京都市内の警察に納本したほか⁴⁴⁾、同人は月2円の維持費を拠出した⁴⁵⁾。
内容は、論文、翻訳、海外の政治情勢や文化を紹介する「世界文化情報」、新刊批評などで
あつた。発行部数は1000部程度、多い時でも1100部と記録されている。読者層は、東京、京
都、大阪、神戸、その他地方の左翼知識人、文化人や学生、執筆者の友人や親戚がそれぞれ3

分の1ずつであり、販売部数は東京が最も多く、次は大阪であったという⁴⁶⁾。ここには、東京に知識人や文化人が集中しているという事情のほかに、東京在住者に執筆を依頼することがあったという経緯が関係していると考えられる。

1936年に入ると、それまで編集事務の中心にいた久野、森本、真下らが就職その他の事情で退き、新村と欄津がその役割を担うようになった⁴⁷⁾。変化としては、6月以降、映画欄、文芸欄、音楽欄、ルポルタージュ欄が次々設けられ、短い批評が載せられるようになる。この時期はフランスの人民戦線内閣成立とも重なる。そして、1937年には、従来の映画、文芸欄に、演劇、科学読物欄が加わる。さらに「世界文化情報」よりも軽めの読み物として「海外消息」欄が新設された。

(2) 『世界文化』と人民戦線

『世界文化』は学術誌と構想され、その路線を忠実に守りつつも、特に1936年以降は文化欄にも力を入れていた。このような文化欄への一層の注力は、『世界文化』の姉妹新聞『土曜日』の発刊や「京都音楽クラブ」⁴⁸⁾の設立と無縁ではない⁴⁹⁾。また、メンバーがラジオ放送で「現代フランス文化の新局面」や「現代の青年について」といった話題について話すこともあったようだ⁵⁰⁾。ここには単に読者獲得の狙いのみを見て取るべきではない。『世界文化』発刊の要因となった滝川事件という学問の弾圧は、同時期ドイツで政権を握ったナチスの脅威と重なり、ファシズムの問題は新村ら若者の胸にも深刻な危機感となって迫っていた。よって、『世界文化』には戦争を憂慮し、ファシズムを警戒する者たちが集っていたのである。そして、反戦・反ファシズムを掲げるフランスの人民戦線運動が重視した戦略の一つが文化運動であったのだ。人民戦線とは、戦争に反対し、ファシズムに対抗するため、党派・団体を超えて結成される統一戦線のことである。新村が共感を寄せた作家、バルビュスやロラン、ジッドらも、この戦線の列に加わっていた。『世界文化』における文化欄への注力は、人民戦線運動の方法論を反映させたものでもあり、このような経緯で、『世界文化』は反戦・反ファシズム文化運動として位置付けられているのである。

フランスで人民戦線が成立したのは、1935年7月14日である。綱領は、フランス社会党のレオン・ブルムと共産党のトレーズらが協議を重ね作成した。そして、1936年春の総選挙に勝利して、同年6月4日にブルムを首班とする人民戦線内閣が誕生した。つまり『世界文化』の活動と並走するかたちで、フランスでは人民戦線運動が盛り上がりを見せた図式になる。少なくとも、『美・批評』『世界文化』『土曜日』の活動をささやかな「知識人の人民戦線運動⁵¹⁾」と語った新村の胸には、そうした意識があったに違いない。ただし、フランスの人民戦線が定義上、労働者階級と中産階級の同盟であったのに対し⁵²⁾、『世界文化』は基本的には富裕な家庭で育った若者で構成されており、労働や労働者という視点を欠いていた点には注意が必要で

ある⁵³⁾。

『世界文化』にとって、フランスの人民戦線の動向は当然報道の対象となり、この運動に関心を抱く他誌から問い合わせを受けることもあった。発行部数が多いわけではなかったが、東京の雑誌から海外事情について問い合わせが来るなど、『世界文化』の「海外文化情報」は情報の正確さについて当時から高い信頼を得ていた。このコーナーは、真下と久野が『美・批評』再刊時に新設し、『世界文化』へと引き継がれたものである⁵⁴⁾。山寄雅子はその内容を分析し、全体のおよそ4分の1がフランス関係の記事であったことを明らかにしている⁵⁵⁾。情報源は、新村が私費で取り寄せたフランスの新聞雑誌であり、彼自身も筆を揮った。新村の熱意は、巻頭を飾る論文や海外論文の翻訳より、「世界文化情報」に注がれていた。彼の記事は同欄のほかの記事に比べて2~5倍の長さであり、分量からも意気込みが伝わってくる。内容の大半は作家や知識人、論壇の動向であり、知識・文化人組織やそのメンバーの人柄、業績の紹介を通して、フランスの反ファシズム運動に言及した記事が多いと山寄は分析している⁵⁶⁾。

こうした反戦・反ファシズムに関わる文化運動の紹介は、日本の時局に配慮しながら慎重になされていた。しかし政治的な人民戦線運動と曲解され、新村は真下、中井らとともに、1937年11月に逮捕・勾留される。一地方である京都において、人民戦線運動が行われ得た要因について、当時の京都地方裁判所検事下川巖は七つの点を指摘した⁵⁷⁾。いわばこれは運動を弾圧した当局側の見解であるが、和田洋一も最後の点を除いて同意しているので、当時の状況に対する理解を深めるため瞥見しておく。

一つ目は、京都にはフランスの事情（特に文化方面）に通じ、かつ左翼的思想を有する知識人が比較的多かった点である。その一人が新村猛であった。二つ目に、京都には自由主義的、民主主義的知識人が多く、伝統的に自由主義的な雰囲気が強かった点がある。これは京都帝国大学が、東京帝国大学に比べて、より自由主義的であったことと関係している。三つ目として、文化運動関係者が比較的近所に居住していたことにより、相互の連絡が非常に楽であった点が挙げられる。加えて、京都が地方的学芸都市である点、専門的知識及び学術的才能のある者が多くいた点が指摘されている。これら二つの点も京都帝国大学の存在抜きには成立しないだろう。『世界文化』においては、専門を異にする者が協力しあった。文学部出身者であっても哲学科、史学科、文学科の者が一緒になり、さらに理学部、法学部の者も加わっていたのである。そして六つ目として、関係者は比較的生活に余裕があったという点が挙げられる。和田によれば、同人のなかには、パリ、チューリッヒ、アムステルダム、ロンドン、モスクワなどで発行されている新聞雑誌を私費で予約購読できる者が複数いた⁵⁸⁾。この点も『世界文化』の特質を考えるうえで非常に重要な指摘である。大学や学館が組織として購入を躊躇われるような種類の新聞雑誌も、ある程度手に入れることができたことは、『世界文化』に特権的な地位を与えたと考えられるからである。

そして最後に、京都の知識人は政治情勢に鈍感であったという点が挙げられている。下川は、東京では文化運動にも政治情勢が直接影響し、言論、出版などの取締が厳しくなったことを直に感じるので、妥協し、極度に弾圧を恐れるが、京都では中央の情勢が直接影響しないので、時局に鈍感であり、むしろ批判的となり、進んで時局に反発しようとし、弾圧を恐れない傾向さえあったようだと述べている⁵⁹⁾。しかし、『世界文化』と東京で発行されていた反ファシズム文化雑誌『セルパン』（1931年5月～1944年3月）の内容を見比べてみると、後者の方が海外の事情について、より政治面に踏み込んだ報道を行なっているという印象を受ける。また、『世界文化』が創刊からただの一度も検閲課からも警察からも指摘を受けなかったことを踏まえれば、同人は非常に慎重に企画・編集を行なっていたと考えるのが自然であり、メンバーの検挙理由をそのまま受け取らないためにも、この点は再三強調しておく必要があるだろう。

(3) 人民戦線に関する記述

それでは、治安維持法の拡大解釈による関係者逮捕の要因となった「人民戦線」は、『世界文化』においてどのように取り上げられていたのだろうか。続いてこの点を見ていこう。

1936年春の人民戦線内閣樹立について、新村は『世界文化』第20号（1936年8月）の「世界文化情報」欄で「フランス新内閣首相レオン・ブルーム」と題して報告している⁶⁰⁾。6ページ超にわたり、ブルームの誠実な人柄とその文筆と政治にまたがる業績の紹介に意を注いだ。ただし、その組閣について両手を挙げて称賛するのではなく、ブルームは戦争の危機を洞察する炯眼を持ち合わせておらず、ファシズムの権力工作や心理学に疎いという意見がかなりあると書いてもいる⁶¹⁾。また、「民衆戦線」という表現を用い記述される「人民戦線」について、その内実が曖昧にされている点も見逃してはならない。

この「人民戦線」という表現を避け、その政治的な内容に踏み込まないという方針は、同人のあいだで共有されていたようだ。例えば、『世界文化』第21号（1936年9月）の「世界文化情報」に掲載された市村恵吾による「文化の家」最近の活動——フランスに於ける文化民衆戦線」は、反ファシズム文化運動の拠点として、パリに置かれた「文化の家」で催された演劇、音楽、映画、絵画、建築、文学など多岐にわたる文化活動と参加した芸術家の名前を紹介した。同時に、この活動が地方にも波及している事実を記した。先述した民衆戦線の勝利がブルーム内閣の成立を経て、文化民衆戦線の動きを盛り上げていることは示されるものの、ここでも民衆戦線がどのような共同戦線であるのかという点については論じられない⁶²⁾。

これは、日本国内の政治情勢を憂慮した『世界文化』の戦術であったと考えられるが、運動としての曖昧さでもあるように思われる。つまり、『世界文化』のメンバーはみな反戦・反ファシズムの意識を共有していたものの、彼らの研究会や雑誌編集会議の場で人民戦線について論議されたことは一度もなく⁶³⁾、その理論について関心を持っていたのは、新村のほか、真

下、久野、瀬津くらいであり、それでもあまり議論はしなかったらしいのである⁶⁴⁾。こうした状況のなかでは、核心部分の記述が曖昧なものになることも理解できる。

ところで、戦後の新村の言説には、戦前、戦時下における自分たちの文筆活動を人民戦線として位置付けようという身振りが見られ、これが研究や批評において『世界文化』が「人民戦線的」と形容される一因になっている。例えば『美・批評』再刊、『世界文化』発刊、加えて『土曜日』創刊という一連の活動を振り返るなかで、これが「たしかに、ささやかながら、知識人の人民戦線運動にほかならなかつたとはいえ、それは、あくまで、われわれが、やむにやまれない気持と学問を愛する熱情にかられて、自発的・自立的におこなった⁶⁵⁾」という点を強調している。ここでの「人民戦線」という表現は、もちろん政治的な意味ではなく、専門領域を超えて多くの学徒が反戦反ファシズムのために筆を執ったという意味で捉えるべきであり、その意味で外側から見れば、確かにこれは人民戦線的な運動であった。しかしその一方で、『世界文化』を内側から眺めるならば、必ずしもメンバー全員が人民戦線に強くこだわっていたわけではないのであり、運動の性質についてはニュアンスを加えながら論じる必要がある。

(4) フランス系の執筆陣

ここまで、『世界文化』において新村がどのような役割を引き受け、彼が強い関心を抱いていた人民戦線が、どのように扱われていたのかを見てきた。以上の点を踏まえつつ、ここからは『世界文化』の主要な関心事である学問文化の擁護と真理の探究が、フランス関係の記事のなかでどのように体现されているのかを考察したい。

まず、新村に協力したフランス系の研究者を見ておこう。本誌で精力的に活動したフランス関係の執筆者として、瀬津正志、森本文雄、市村恵吾がいる。瀬津正志は、1929年3月に浦和高等学校を卒業。1932年3月に京都帝国大学文学部史学科国史専攻を卒業。京都帝国大学大学院で考古学の研究を行う。『世界文化』においては、本名のほか、「坂」「阪」「筑紫明」「鈴木恭」「沢村」という筆名を用い⁶⁶⁾、ギュスターヴ・クールベやスペインの社会動向について研究論文を発表したほか、新刊批評、文化紹介などほかの欄でも多数の記事を翻訳・執筆した。また、その活動の場は『世界文化』に留まらず、東京の『セルパン』誌に寄稿し⁶⁷⁾、『労働雑誌』(1935年4月～1936年12月)とも関係を持っていたようである⁶⁸⁾。

森本文雄は新村の仏文科の後輩にあたる。1933年に仏文科を卒業し、1934年4月から、新村の紹介で『美・批評』研究会に参加した⁶⁹⁾。「三浦忠雄」「宇治」の筆名で執筆にあたった⁷⁰⁾。演劇を専門としていたこともあり、モリエール論やアメリカの新興演劇に関する研究論文を寄稿した。彼もまた、映画、文学、政治動向などジャンルを問わず、多数の記事を執筆した。関西日仏学館の生徒でもあり、本館の学友会が発行する同人誌にミュッセに関する論説を寄せている⁷¹⁾。

市村恵吾は、新村より一回り近く若い。1931年4月三高文科丙類へ入学、1934年4月に京都帝国大学文学部文学科へ入学し、フランス文学を専攻した。彼の父親は京都帝国大学法学部教授であり、また彼の兄は新村猛の一中時代の旧友であったため、市村家と新村家は家族ぐるみの付き合いだった⁷²⁾。1934年9月より『美・批評』研究会に参加していた⁷³⁾。「村岡正太郎」という筆名を用い⁷⁴⁾、森本とともに新村を助け、自身も「世界文化情報」を中心に精力的に執筆を行なった。

(5) 「ありのまま」に伝えることの二重性

さて、それでは彼らは『世界文化』において、どのような記事を書いたのだろうか。本稿では、『世界文化』が創刊号で掲げた「真理」の探究を、彼らがどのように実現しようとしたのかという点に絞って考察を進めたい。

新村らが取り組んだ「真理」の探究とは、何も「平和とは何か」というような大きな問いに対して、一致団結して一つの答えを見つけ出すことではなかった。フランス系の執筆陣が筆を揮った情報欄について言えば、これは国外の情勢をありのままに報告することであった。海外の事情を伝える限り、そこには地理的、文化的、言語的、また経済的な壁がある。つまり、事件が起こってからタイムラグであったり、文化的背景の理解不足による誤解であったり、外国語につきまとう誤読・誤訳という壁がある。そもそも元手がなければ、自主的にそうした情報にアクセスすることすら不可能な状況であったろう。1930年代の京都とは、今以上にこうしたさまざまな障壁と戦わなければならない場所であった。

そのなかで新村は、次のように「世界文化情報」の意義を強調する。「ジッドやフェルナンデスのことに就いても、フランスの智識階級の動向に就いても、様々活潑な言説や報告が行われて頼もしく感じられはするが、その中に少からぬ誤報や謬見が混入してゐると思ふので、「情報」子は、それらを訂正し、或ひは新しい事実を紹介・傳達して、現下のフランスの知識人の動向に興味を抱かれる読者の参考に供さう⁷⁵⁾」。ここには種々の困難に打ち克とうとする知識人としての強い自負が感じられる。実際に『世界文化』の伝える情報が高い信頼を得ていたことは先述のとおりである。

よって、新村らが企図した「ありのままに」というスタンスは、まず海外で政治的に黙殺ないしは歪曲されている物事を、日本でできるだけ忠実に伝えるというものであった。現場から遠く離れていることは困難を生みもするが、その一方で利点もある。例えば、現地から遠く隔たった日本では、各国の複雑な情勢を俯瞰的に見ることができるだろう。同時に日本では実現が困難な政治運動について、もしくは日本で今後憂慮される事態について、海外の事情に仮託して意識を高めることも可能なはずである。

こうした可能性について、フランス系の執筆者は意識的であったように思われる。海外の事

情を俯瞰的に見るということに関しては、『世界文化』第2号（1935年3月）の「世界文化情報」欄に掲載された、森本文雄の「巴里における作家大会の報告演説会その他」を一例として挙げるができる。これは、モスクワで開催された作家大会に参加した、アラゴンやマルローなどフランスの作家たちが帰国後行なった報告演説会について記した文章である。会の盛況ぶり、報告者の発言などが紹介されているのはもちろんであるが、興味深いことに、森本はそれと同じくらい紙幅が割いて、報告演説会を報道したフランスのジャーナリズムに対する批評を行っている⁷⁶⁾。『現代』『アントランシジャン』『プチジュルナル』『ウーヴル』などが、多少の寡多はあれ正確な報道を目指したものであると評価する傍ら⁷⁷⁾、これを黙殺した新聞があることを指摘し、また「大都會の大新聞の中には露骨な歪曲を以て数々の迷論を吐き、會の顕著な影響を制へようとする「奉仕」を露にするものが多い⁷⁸⁾」, 「大新聞の中には虚報どころか殆ど悪態をつく事にのみ専念してゐたものがある⁷⁹⁾」など、複数紙取り上げ報道の内容を分析している。この記述について単にフランスの政治とジャーナリズムの関係を知らせる思惑のみを読み取るべきではないだろう。つまり、フランスにもさまざまな報道の仕方があるなかで、自分たちは、それらの真偽を見極める目を持ち、真実を伝える力があることが示されてもいるのである。こうした姿勢は同人のなかで共有されていたようである。例えば、『世界文化』第7号（1935年8月）に「ギュスタヴ・クールベエ——書き直された彼の傳記」を発表した欄津にしても、現在日本に流布しているギュスターヴ・クールベの伝記はパリ・コミューン期の記述が抜け落ちていたために、「彼の偽られないゆがめられない有りのまゝの傳記を書いて見よう⁸⁰⁾」という気持ちから、シャルル・レジェのクールベ伝に依拠し、彼の生涯を紹介した。

他方、海外事情の紹介を通して警鐘を鳴らす例として、ナチの独裁により、議論ができず、政府の意見のみを公表するドイツ新聞界の現状について、統計を添えて伝える欄津の文章や⁸¹⁾、『世界文化』第5号（1935年6月）における新村の記事が挙げられる⁸²⁾。「フランス文化ニュース」を担当した新村は「パリに於ける国際文化擁護作家大会の開催とその実行草案」「国際ファシズム展覧会」「作家連盟」の『文化の家』の開館式」「兵役年限延長に抗議する反ファシズム作家・美術家」を紹介し、「以上、歐洲に於ける第二次戦争防止のための文化運動と、作家などが右のやうな強く抗議文を提出することができるフランスの特殊な情勢とを有りのまま報道したまでである⁸³⁾」と述べている。

しかし同時に、こうした「有りのまま」の報道が執筆者の意図に基づいた選択の結果であることにも意識的である必要があるだろう。この点を示す興味深い例として、椎原伸博の研究を示したい。椎原は、『セルパン』誌1937年9月号に新村が寄稿したピカソの《ゲルニカ》紹介⁸⁴⁾を分析している。椎原によれば、これはフランス共産党の夕刊紙『ス・ソワール』の1937年7月13日号最終面に掲載された写真記事を流用したものであった。『ス・ソワール』では、無関係なスポーツの写真などと同じ紙面に《ゲルニカ》全体の写真と作品を前にしたピ

カソのアップの写真が、「展覧会のピカソ」というキャプションと簡単な説明文を添えて掲載された⁸⁵⁾。対して新村は写真を流用しているものの、内容に関して、かなり大幅に肉付けをしている。すなわち、スペイン内戦勃発後、スペインの作家・芸術家、反ファシスト知識人たちがどのような道を辿ったかを略述し、ピカソの近況を詳しく紹介している。もちろんゲルニカ爆撃についても言及している。この点について椎原は、新村が「美術作品に対する興味や評価といった視点は乏しく、ゲルニカの惨劇に対するピカソの批判的な立場の表明の説明に終始」している⁸⁶⁾と指摘した。だが、単にそこにネガティブな意味のみを読み取っているわけではない。椎原によれば、「日本における《ゲルニカ》そして「頽廃芸術」の紹介は、美術プロパーとは異なる言説空間において、当時の政治状況に抗うような状況でなされていた⁸⁷⁾」のである。

同様のケースは『世界文化』第7号（1935年8月）の「世界文化情報」にも見られる。新村はここで「巴里に於ける三つの伊太利美術展覧会⁸⁸⁾」と「ゴヤの版画・デッサン展覧会⁸⁹⁾」という記事を書いている。前者は具体的な作品の紹介ではなく、その開催が政治的要因に基づくことを指摘する。そして後者は作品の紹介というよりも、ゴヤのキャリアを紹介する文章であり、政治情勢に考察を促す狙いが垣間見える。

以上のように、『世界文化』が掲げた「真理」の探究をキーワードに記事を眺めてみると、「世界文化情報」に限っても、さまざまな思惑が交差していることがわかった。一方では地理的な距離を活かして、俯瞰的に情勢を眺め、批評を行い、異なる視点から事実の再構成を試みることができた。他方では、憂慮すべき事態の報道は、日本の現状に警鐘を鳴らす役割も果たしていたと言える。こうした誌面づくりは「ありのまま」に伝えるのだという固い意志に貫かれていたように思われるが、同時にこの「ありのまま」が、時に、海外の記事からさらに一歩踏み込んだ部分を掬い取り伝えていたことは、椎原の分析が示したとおりである。これは新村や『世界文化』に固有の問題ではなく、出来事とそれを知る人々を媒介するメディアにつきものの、「ありのまま」の二重性として捉えるべきであろう。

(6) 1930年代京都における『世界文化』

ここまで見てきたように、『世界文化』の「世界文化情報」は、海外の時局に対して、また日本の現状に対して、強い問題意識を持ち、情報を発信してきた。検閲を免れるために、直接的な批判や提言とはならなかったとはいえ、文筆の力によって、社会に働きかけた意義は極めて大きい。この点を補強するために、『世界文化』の刊行と同時期に行われた関西日仏学館の文化事業を検討したい。

1935年から37年にかけて行われた52の関西日仏学館の文化事業のうち、講演は28回、演奏会は13回行われている⁹⁰⁾。講演は通訳を付けずにフランス語で行われたと考えられる。主題は「フランスにおける労働争議」（1935年6月1日）、「インドシナに関する記録映画の紹介」

(1936年2月8日),「ロマン・ロランと音楽」(1936年10月19日),「B.C.G. ワクチン接種による結核予防」(パリ・パストゥール研究所のフィルム上映あり, 1937年5月1日),「フランスにおける先史時代の美術」(スライド上映あり, 1937年12月4日)などであった。このように挙げてみると学際的で充実したプログラムであるように思える。だが, 詳しく分析してみると, 専門的な話をするのは東京の日仏会館を拠点に日本を回るフランスの研究者であり, 生演奏やレコードとセットになった音楽関係の講演は, 学館のスタッフや神戸のフランス領事が行うという棲み分けがなされていたことがわかる。

このような講演体制について, まず指摘しておくべきは, 学館が自らの運営方針や裁量によってプログラムを組んでいたわけではないということである。学館はフランス外務省管轄の機関であるから, 日仏会館と協力して, 滞在研究者に場所を提供するのは当然であるものの, こうした事例からは, 学館の「ハコモノ」的な側面が垣間見える。

同時に注目すべきは, 講演のテーマに作家や文学作品が選ばれることが極めて稀であったという事実である。もちろん, ここには聴衆の語学力の問題があるだろう。知識よりも, 言葉そのものを味わう文学作品について, フランス語に通じていない人々にその魅力を, フランス語で伝えることはほとんど不可能に近い。よって, 実のところ, 講演のうち三分の一は音楽やオペラを題材としたものであった。つまり文化プログラムのおよそ半数は音楽に関わるものだったのである。とりわけ, 京大の側に拠点を移して以降, 音楽関係の割合が一気に増えてくる。この変化については, すぐ隣で活動する獨逸文化研究所への対抗意識を指摘できる。つまり, 音楽とは言語を介さず, 広く聴衆にフランスの魅力を訴えるための重要な手段だったのである。

このように音楽が政治的に利用される反面で, コンサートや音楽についての講演は政治性を顧慮することなく開催可能であったという点にも注意を促したい。フランスの作家のなかには単に小説や批評を書くだけでなく, 政治的な立場を表明し, 行動する知識人も多かった。新村が傾倒したロランやバルビュス, ジッドなどがそうである。よって, 講演でフランス文学をテーマにすれば, 思いもよらぬところから政治的な意図を引き出され, 学館の活動を制限される恐れがあった。その点, 音楽に関わる事業は問題視される危険性が低く, そのため自然と多くプログラムが組まれることになったと考えられる。先ほど示したように, 音楽関係の講演を担当したのが日本で暮らすフランス人だったことを考え併せれば, ここには彼らを検束から守るという意図が透けて見えるだろう。

確かに学館で働く人々は、『世界文化』の同人よりも, フランスの実情について, 早く, また正確に把握することができていたはずだ。しかし, フランスの施設であると同時に, 私立学校として日本の制度に組み込まれた学館は, 政治的な局面で何らアクションを起こすことのできない不自由な立場に置かれていた。このように考えてみると, 曖昧な部分があったとはいえ、『世界文化』がフランスの人民戦線運動やドイツの実情を伝えていた意義はやはり大きい。

それでは最後に、『世界文化』の研究論文が京大仏文科の講義内容と重なることを指摘したい。執筆者が仏文科出身なのだから当然だと言われるかもしれない。しかし彼らが探求した「世界文化の大通り」が、大学のアカデミズムと地続きであることは、本誌の評価を定めるうえで、やはり押さえておくべきだろう。紙幅の関係上、論文タイトルを挙げるに留めるが、例えば、森本文雄は、『世界文化』第4号（1935年5月）文学特集号に「モリエールの喜劇について——「タルテュッフ」研究序論」を、同誌第7号（1935年8月号）及び「モリエールと喜劇『タルテュッフ』」を發表している。モリエールの『タルテュッフ』は、1924年、1928年の太宰施門の「講読」及び、1930年の落合太郎の「講読」の授業で扱われている⁹¹⁾。太宰がモリエールのほかの作品や、ラシーヌやコルネイユなど戯曲に関する授業を多く開講していたことも、執筆を助けたと考えられる。また、新村猛は高杉焔という筆名で、『世界文化』第6号（1935年7月号）に「邦訳モンテニユ『エセエ』刊行に際して」を寄稿している。モンテニユの『エセエ』に関する講読の授業は1924年、1925年、1931～33年、1936、37年に落合により開講されている⁹²⁾。

こうした開講科目との関係から示すことができるように思われるのは、「學問文化への不信頼と絶望」が、無軌道な反発へと墮することなく、強い原動力となり、大学における研究と連続性を保ちながら、学問の新たな探究へとつながっていたという点である。これは、京都人文学園創立の背景の一つとなった「対抗文化」像にニュアンスを加えるものでもあるだろう。戦後の教育文化運動の文脈における「対抗文化」とは、山寄雅子のまとめに従うならば、従来の文化に従属せず、むしろその文化に対峙する文化であり⁹³⁾、既存の価値や権威の客観的分析に基づきながらも、それとは異なる価値視点の提示と浸透を目指すものである⁹⁴⁾。人文学園は、それまでの学校教育に対する批判と反省の上に立ち、それとは異なるあり方を探ったのであった。

しかし、人文学園成立の母胎となった『世界文化』におけるアカデミズムの扱いは、むしろモリエールやモンテニユといった古典的な主題を、不安定な雑誌という場に導き入れることにより、自らの運動を権威付けるとともに、戦争やファシズムへの抵抗の意義を権威的な学問の側に投げ返すような、そうした動きとして捉えることができるのではないか。こうした意味で、『世界文化』から人文学園へと至るまでの「文化」と「学問」の関係は極めて複層的である。京都帝国大学や学館が『世界文化』に共鳴して、表立って反戦や反ファシズムを掲げて戦うということはなかったかもしれない。しかし、三者三様に学問と文化の擁護のために、限界に踏みとどまりながら活動を続けた事実にもやはり目を向けるべきである。いわば、それらが相互に影響を与え、補い合ったのが1930年代の学都京都の特殊性であり、これを人文学園成立史の余白に書き加えることも、おそらく許されないことではないだろう。

結びに代えて

本稿では、これまで繰り返し組上に載せられ、もはや自明なものとなっていた新村猛とフランスの関係、『世界文化』におけるフランスの位置を、1930年の京都という文脈に位置付けることによって、再考しようと試みてきた。京都帝国大学仏文科及び関西日仏学館との比較を通して明らかになったのは、学都京都で形成されたフランスの学術ネットワークが新村らの文筆を支えたこと、そして固定した場所を持たない『世界文化』の独自性と意義であった。

ここで簡単に振り返っておくと、まず新村にとってフランス文学とは、必ずしも作品の問題ではなく、思考の媒介要素として重要だったのであり、このことが、新村独自の事象へのアプローチや、『世界文化』や人文学園を推し進める行動として現れてきたと言える。そして、京都帝国大学仏文科は、新村の語学力を高め、フランス文学に対する関心を深め、人脈を築く場となった。ここでの学びが『世界文化』の内容と質に影響していることは、本論で述べたとおりである。

京都帝国大学が、具体的な場所と堅固な制度を有する文化・教育の拠点であったとするならば、『世界文化』は、メディアという特質を活かした、より流動的で柔軟なアカデミズムと文化の守り手であったと言えよう。大学が公に表明することができない社会的・政治的な主張を、『世界文化』の同人たちは海外事情の「紹介」を通じて積極的に発信した。この意義の大きさについては、関西日仏学館の授業や文化事業との比較を通じて明らかにした。

しかし、『世界文化』がメディアであったからこそ実現しえた「ささやかな人民戦線運動」を人文学園という教育制度へと移植することは、構想の時点で矛盾と破綻を含んではいなかっただろうか。学園がたどることになった困難な道のりは、生徒数の減少、経済難、新村ら中心人物の移籍など、さまざまな要因によって説明できるが、その根本には、学園を内側から支える理想と外側から教育を規定する制度の相剋があったように思われる。このように考えてみると、京都人文学園のケースは、新しい教育空間の創出への試論となるのであり、この小さな「学校」について研究することは、現行の制度そのものに改革を迫るような提言の鍵となるはずだ。

付 記

本論文執筆のために、快く手を差し伸べてくださり、また写真資料の掲載を許してくださった新村恭氏に心より感謝申し上げます。また、本稿は京都大学人文科学研究所人情情報学創新センター「京都における日欧文化学術交流史」の調査成果を活用したものである事を記しておきたい。

注

- 1) 山崎雅子『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』, 風間書房, 2002年, 13頁。
- 2) 同上, 85頁。
- 3) 山崎雅子「敗戦直後の啓蒙・教育運動における戦前派知識人の心性と教育実践——新村猛の教育運動とその論理を事例として」, 『日本の教育史学』43号, 教育史学会, 2000年, 100頁。
- 4) 前掲山崎『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』, 31-49頁。
- 5) 新村猛の経歴やフランス文学との関わりについては, 今江祥智・川村孝則編『新村猛著作集』第二卷(三一書房, 1994年)および今江祥智・川村孝則編『新村猛著作集』第三卷(三一書房, 1995年)によっている。特に, 新村猛「フランス文学徒の前半生」, 大高順雄編『フランス文学とわたし』(平凡社, 1985年)所収, 『新村猛著作集』第三卷再録, 591-602頁, 新村猛「一平和活動家の反省——ロマン・ロラン生誕百周年に際して」『展望』(筑摩書房, 1966年), 『新村猛著作集』第二卷再録, 12-41頁を参照した。
- 6) 新村猛「折竹錫先生」, 初出『朝日新聞』夕刊1962年1月8日号, 前掲『新村猛著作集』第三卷再録, 529頁。
- 7) 新村猛「かけがえない人生——若い日の思い出」, 初出『学習のひろば』1974年9月号, 前掲『新村猛著作集』第三卷再録, 554頁。
- 8) この辺りの事情については, 前掲「フランス文学徒の前半生」に詳しい。
- 9) ジョレスへの敬愛は, リュシアン・レヴィ=ブリュールの『ジョレス伝』(1916)を読んで感銘を受けたことに始まると新村は振り返る。その後, ジョレスの言説とは対立するマルクスとレーニンの共産主義・社会主義へと接近していったのは, 社会変革への問題意識からではなく, 戦争に反対し, 平和を守りたいという強い願いによるものであった。この切実な思いは, 新村自身が幼少時代, 繰り返し伝染病にかかり, 命の尊さを実感したこと, 平和な時代に青春を謳歌したことからくるものであった(前掲新村「一平和活動家の反省」, 15-16頁)。
- 10) 新村猛「卒業生における——理性的な行動と思考を」, 初出『名古屋大学新聞』1962年3月22日号, 前掲『新村猛著作集』第三卷再録, 533頁。新村はここで, 1937年のデカルトの『方法序説』刊行300年を記念した, ベルグソンの「行動の人として思考し, 思考の人として行動する」という言葉を紹介し, 「思考」と「行動」の上に, 「理性的に」という副詞を付け加えたいと述べている。
- 11) 前掲新村「一平和活動家の反省」, 21頁。
- 12) 同上, 18頁。
- 13) 前掲新村「フランス文学徒の前半生」, 575-576頁。
- 14) 前掲山崎「敗戦直後の啓蒙・教育運動における戦前派知識人の心性と教育実践」, 100頁。
- 15) 京都大学文学部フランス語学フランス文学専修の歴史については, 以下の論文にまとめられている。岩永大気「京都大学におけるフランス研究の歴史」, 『仏文研究』48号, 京都大学フランス語学フランス文学研究会, 2017年10月, 187-214頁。
- 16) 同上, 189頁。
- 17) 『京都帝國大學文學部講義題目 自大正十三年度至昭和十二年度』(京都大学文学部所蔵資料)
- 18) 前掲新村「フランス文学徒の前半生」, 597頁。
- 19) 太宰施門によれば, 彼が在任した26年間に迎えた外国人講師は皆フランス人であった。太宰施門「外人教師」, 『京都大學文學部五十年史』京都大學文學部, 1956年, 450頁。
- 20) 前掲新村「フランス文学徒の前半生」, 598頁。
- 21) 同上, 同頁。

- 22) 学館の歴史については、以下の論文、研究書を参照。ミッシェル・ワッセルマン『京(みやこ)にフランスあり！——アンステイチュ・フランセ関西の草創期』立木康介訳(京都大学人文科学研究所みやこの学術資源研究・活用プロジェクト, 2019年); ミッシェル・ワッセルマン『ポール・クローデルの黄金の聖櫃——〈詩人大使〉の文化創造とその遺産』三浦信孝・立木康介訳(水声社, 2022年); 拙稿「関西日仏学館と女性たち——九条山時代九条山時代(1927~36)における女子部の活動を中心に」(『人文学報』117号, 京都大学人文科学研究所, 2021年5月) 107-121頁。
- 23) 学館の文化プログラムについては、本『人文学報』122号の〈資料紹介〉「関西日仏学館(京都)に関する資料」を参照。
- 24) 獨逸文化研究所の公的な報告書の一部は、京都大学人文科学研究所が保管しているほか、国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧することができる。
- 25) 関西日仏学館『会務報告』1942年度および1943年度(関西日仏学館所蔵)
- 26) 関西日仏学館では、1927年の創立時から1936年まで、「Directeur」の日本語の呼称は「主事」であった。1931年当時のポノーの役職は館長に相当する。
- 27) 前掲『京都帝國大學文學部講義題目』より。
- 28) 関西日仏学館学友会『学友会誌』第二号(1934年8月), 46頁。
- 29) 本『人文学報』122号の〈資料紹介〉「関西日仏学館(京都)に関する資料」参照。
- 30) 前掲『京都帝國大學文學部講義題目』より。
- 31) 前掲新村「フランス文学徒の前半生」, 599頁。
- 32) 同上, 同頁。
- 33) 同上, 601-602頁。
- 34) 『日仏文化協会・関西日仏学館会務報告』昭和13年度, 日仏文化協会, 1939年, 6-9頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/1073849> (参照 2024-03-21)
- 35) 辻部政太郎「解説」, 久野収編『中井正一全集』第二卷, 美術出版社, 1965年, 372頁。国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/pid/2467987> (参照 2024-03-21)
- 36) 平林一「『美・批評』の人々——『世界文化』研究(一)」, 『キリスト教社会問題研究』第9号, 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会, 1965年3月, 90頁。
- 37) 前掲新村「一平和活動家の反省」, 24頁。
- 38) 同上, 25頁。
- 39) 同上, 24頁。
- 40) 前掲新村「半生を自ら語る」, 563頁。
- 41) 座談会『世界文化のころ』における新村猛の発言。『世界文化』同人編『世界文化 復刻(三)』(小学館, 1975年)所収, 24頁。
- 42) 『世界文化』創刊号(1935年2月), 世界文化同人編『世界文化 復刻(一)』(小学館, 1975年)所収。
- 43) 下川巖「人民戦線と文化運動」, 社会問題資料研究会編『人民戦線と文化運動』(思想研究資料特別号第77号)社会問題資料叢書第1号(東洋文化社, 1973年)所収, 105頁。
- 44) 和田洋一『灰色のユーモア』, 人文書院, 2018年, 13頁。
- 45) 前掲下川「人民戦線と文化運動」, 105頁。
- 46) 同上, 106頁。
- 47) 同上, 118頁。

新村猛と『世界文化』（藤野）

- 48) 「京都音楽クラブ」は、1937年2月頃に、前述の『美・批評』のメンバーで音楽を専門としていた長広敏雄らに、『世界文化』の新村や和田、辻部などを加えて結成された。これは市民から広く会員を募集し、音楽会や講習会を開催するというものであり、200名の募集に対して、270名の応募があるという大変な盛況ぶりであった。そしてその会場として用いられたのが、獨逸文化研究所と関西日仏学館なのであった（前掲下川「人民戦線と文化運動」、196頁）。両施設は文化プロパガンダの一環として、頻繁にコンサートを開いており、安定した集客が見込める「京都音楽クラブ」との提携は、利するところが大きかったと想像される。
- 49) 『世界文化』と『土曜日』の成立経緯、同人、内容及び編集方針の変遷などについては、以下の研究書のなかで詳細な分析が行われている。前掲山崎『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』、17-92頁。
- 50) 前掲下川「人民戦線と文化運動」、199頁。
- 51) 前掲新村「一平和活動家の反省」、25頁。
- 52) 渡辺和行『フランス人民戦——反ファシズム・反恐慌・文化革命』、人文書院、2013年、14頁。
- 53) この点は後年新村自身が反省していることでもある。本小特集が併録した、関西政治労働学校での講演で、新村が民主戦線における労働者の重要性を強調するのも、こうした経緯を踏まえてのことである。
- 54) 前掲下川「人民戦線と文化運動」、115頁。
- 55) 前掲山崎『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』、31-50頁。
- 56) 同上、34-35頁。
- 57) 前掲下川「人民戦線と文化運動」、277-285頁。
- 58) 和田洋一「解説」、前掲社会問題資料研究会編『人民戦線と文化運動』、10頁。
- 59) 前掲下川「人民戦線と文化運動」、285頁。
- 60) 関口（新村猛）「フランス新内閣首相レオン・ブルーム」、『世界文化』第20号（1936年8月）33-39頁、世界文化同人編『世界文化 復刻（二）』（小学館、1975年）所収。
- 61) 同上、38頁。
- 62) 村岡（市村恵吾）「文化の家」最近の活動——フランスに於ける文化民衆戦線』、『世界文化』第21号（1936年9月）24-32頁、前掲『世界文化 復刻（二）』所収。
- 63) 前掲新村「一平和活動家の反省」、26頁。
- 64) 前掲新村「フランス文学徒の前半生」、566頁。
- 65) 前掲新村「一平和活動家の反省」、25頁。
- 66) 前掲『世界文化 復刻（一）』、2頁。
- 67) 筑紫明「ドイツ自由党ナチス反対宣言を発表」、『セルバン』1937年6月号、第一書房、92-93頁；筑紫明「バルセロナ暴動の真相」、『セルバン』1937年8月号、第一書房、40-42頁。
- 68) 渡辺悦次「解題にかえて」、文献資料刊行会編『労働雑誌復刻版（上）』、柏書房、1980年、13頁。
- 69) 前掲下川「人民戦線と文化運動」、249頁。
- 70) 前掲『世界文化 復刻（一）』、2頁。
- 71) 森本文雄「戀愛指南・ミュッセ傳」、前掲『学友会誌』第二号（1934年8月）、1-6頁。
- 72) 稲垣真美・熊谷かおり編著『われら自由の学び舎に育ち——京都一中百五十周年記念』ミネルヴァ書房、2018年、371頁。

- 73) 前掲下川「人民戦線と文化運動」, 250 頁。
- 74) 前掲『世界文化 復刻 (一)』, 2 頁。
- 75) 関口 (新村猛)「フエルナンデス・行動主義・作家連盟」, 『世界文化』第 4 号 (1935 年 5 月), 44 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収。
- 76) 三浦 (森本文雄)「巴里における作家大会の報告演説会その他」, 『世界文化』第 2 号 (1935 年 3 月), 38-43 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収。
- 77) 同上, 41 頁。
- 78) 同上, 同頁。
- 79) 同上, 42 頁。
- 80) 欄津正志「ギュスタアヴ・クウルベエ——書き直された彼の傳記」, 『世界文化』第 7 号 (1935 年 8 月) 17 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収。
- 81) 阪 (欄津正志)「ドイツ新聞界の現状 デ・テレグラアフ紙」(世界文化情報), 『世界文化』第 3 号 (1935 年 4 月) 60-62 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収; 欄津「ドイツ新聞界の萎縮」(世界文化情報), 『世界文化』第 13 号 (1936 年 1 月) 43 頁, 前掲『世界文化 復刻 (二)』所収。
- 82) 関口 (新村猛)「フランス文化ニュース」, 『世界文化』第 5 号 (1935 年 6 月) 46-51 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収。
- 83) 同上, 51 頁。
- 84) 関口弘 (新村猛)「ピカソとスペイン革命」, 『セルパン』1937 年 9 月号, 第一書房, 78-79 頁。
- 85) 椎原伸博「日本におけるピカソ作《ゲルニカ》の受容について——新村猛と瀧口修造の立場」『実践女子大学美學美術史學』第 37 号, 実践女子大学, 2023 年 3 月, 44 頁。
- 86) 同上, 45 頁。
- 87) 同上, 46 頁。
- 88) 関口 (新村猛)「巴里に於ける三つの伊太利美術展覧会」(世界文化情報) 『世界文化』第 7 号 (1935 年 8 月) 57-60 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収。
- 89) 関口 (新村猛)「ゴヤの版画・デッサン展覧会」(世界文化情報) 『世界文化』第 7 号 (1935 年 8 月) 60-61 頁, 前掲『世界文化 復刻 (一)』所収。
- 90) 本『人文学報』122 号所収の〈資料紹介〉「関西日仏学館 (京都) に関する資料」における関西日仏学館の文化事業のリストを参照。
- 91) 前掲『京都帝國大學文學部講義題目』より。
- 92) 同上。
- 93) 前掲山崎『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦後の文化運動』, 5 頁。
- 94) 同上, 11 頁。

要 旨

仏文学者である新村猛は、戦後創立された京都人文学園の理念や教育方針の練り上げに重要な役割を演じた。新村は1930年代に反戦・反ファシズム運動を展開した『世界文化』グループの中心人物であり、この活動のなかで培われた信念と人脈が人文学園の基盤を準備した。

京都で発行された『世界文化』（1935年2月～1937年10月、全34号）は合法紙として海外事情の「紹介」というかたちで、人民戦線的な文化運動を展開した。1930年代における集団的・組織的な文筆による抵抗運動として、政治、文化、ジャーナリズムなどの各方面において高く評価され、敗戦直後に盛り上がりを見せた教育文化運動、とりわけ京都人文学園の胚胎として注目されている。

新村の思想形成にフランスの知識人が与えた影響や、『世界文化』におけるフランスの重要性については、すでに先行研究によって明らかにされているが、本稿は、こうした新村とフランスの結びつきや『世界文化』におけるフランスの表象を1930年代の京都という文脈のなかで再考するものである。新村が通った京都帝国大学文学部仏文科や大学の隣に位置した、フランス政府公認の文化・教育機関である関西日仏学館は、東京とは異なる背景のなかで、京都独自のフランス・アカデミズムのネットワークを形成していた。本稿では、これらの機関の授業や文化事業と比較することで、『世界文化』の意義に新たな角度から光を当てる。

キーワード：新村猛、『世界文化』、関西日仏学館、京都帝国大学、フランス語教育

Abstract

Takeshi Shinmura, a scholar of French literature, played an important role in developing the philosophy and educational policies of the Kyoto Jinbun Gakuen, which was founded after the war. Shinmura was a central figure in the magazine *Sekai-Bunka* that developed the anti-war and anti-fascist movement in the 1930s, and the beliefs and personal connections he developed through these activities prepared the foundation for the Jinbun Gakuen.

The influence of French intellectuals on the formation of Shinmura's thought and the importance of France in *Sekai-Bunka* have already been clarified in previous studies, but this paper aims to reconsider these ties between Shinmura and France and the representation of France in *Sekai-Bunka* in the context of Kyoto in the 1930s. The French Literature Department of Kyoto Imperial University, which Shinmura attended, and the Institut franco-japonais du Kansai, a French cultural and educational institution located next to the university, formed a unique network of French academism in Kyoto. This paper sheds new light on the significance of *Sekai-Bunka* by comparing it with the classes and cultural programs of these institutions.

Keywords: Takeshi Shinmura, *Sekai-Bunka*, Institut franco-japonais du Kansai, Kyoto Imperial University, French Language Education